特別寄稿

おやさと研究所滞在記

南華大學宗教學研究所教授
邱　琡雯　*Qiu Shuwen*

私は2022年６月から３カ月間の夏休みを利用し、台湾科学技術部の海外短期研究補助金（補助科學與技術人員國外短期研究）で「戦後天理教台湾人女性布教師のおぢば帰り」を研究調査するため天理大学附属おやさと研究所へフィールドワークへ赴いた。帰路の折振り返ってみれば、大変円満かつ充実した旅であったと、深く感銘を受けた。

台湾人女性布教師とは、台湾に生まれ育ち、また講元もしくは布教所の所長、教会長の経験者の方々を指す。私は2017年の夏に「天理教台湾人女性布教師の信仰と移動経験」の研究調査を開始して以来、おぢばを訪問するまで、関係者インタビュー、関連文献と写真の収集、活動記録を行い、のべ19名の方々の信仰の生い立ちを一つ一つ記録していった。しかし彼女らがなぜおぢばへ滞在し、一体どのような日々を過ごし、自らの心境がどう変化したのかを十分浮き上がらせるには至らなかった。したがって、おぢばという空間を自分の目で見て彼女らの軌跡を確かめる必要があった。今回おぢばを訪問し初めてこの作業を実現できた。

私はまず、『みちのだい』、『海外布教伝道部報』、『海外部報』、『台灣傳道廳通訊』、『修養科月報』、『フォルモサ』、『梅華』、台湾人信者が多くいる敷島、山名、芦津大教会の教会報『敷島』、『正道』、『眞明』などの資料を幅広く閲覧することから着手した。古い各種記事の文献や写真を読むことで思いがけない発見を得た。そうした発見の連続から得た楽しみと喜びが研究の大きな原動力となった。

次に私は堀内みどり主任の手厚いサポートで、計２回の研究報告を開かせていただいた。滞在中の研究計画と研究成果をまとめるのが主な目的だ。報告会の場を提供していただいた台湾伝道史編集委員会及び研究所に感謝申し上げる。また４回にわたる研究会合は堀内主任をはじめ、海外部アジア二課の有賀善徳さんと井手勇さんお三方のご助力を得て行われた。私の発する様々な質問や理解の齟齬に対し、皆様が懇切丁寧に回答・訂正してくだったことは、私に研究の道に一人ではないことを強く実感させ心の支えになった。ここに深く感謝申し上げる。

次に私はおぢばで貴重な参与・観察する機会を数多く得たこと。６月から数えて３回の月次祭に参加した。別席と修養科の教室や廊下から、朝と夕勤めの神殿まで見学した。また敷島、山名、芦津大教会の詰所も訪ね歩き、教祖のお墓地と生家、『教祖伝』に出た多くの地名と場所（石上神宮や大和神社など）をあちこち見て回った。おぢばに滞在する間、週に３～４回神殿と教祖殿に上がって、親神様と教祖に研究日程を逐次報告する事を習慣としていた。私は天理教の信者ではないが、信者たちと同じように振る舞う中で、次第に精神が落ちつくのを感じ、親神様と教祖をより身近に感じた。私は、ほぼ毎日爽やかな朝風を迎え、自転車に乗り各詰所と教会に出かけた。途中見かける美しい漢字の看板が、私に一日の始まりを告げた。この３カ月間、偉大で壮麗な天理の世界にすっかりはまった私は、至福に包まれた旅人である。

もう一つ大きな収穫は天理教の女性観に触れたことを挙げられる。天理教の原典と教典を読むのは叶わなかったが、教内外の研究者がすでに発表した論文を参考しつつ、女性観の時期を定義し、教祖の時代（1838～1887）、教会設立と一派独立公認準備時代（1888～1909）、婦人会創立から終戦まで(1910～1945)、戦後復元から二代真柱様出直しまで（1945～1967）に分類した。天理教の女性観が時代ごとにどのように形成・変容・再構成されていったかが、教祖、教団、信者三つの側面から論議されてきた膨大な研究成果はすでに存在している。これを読み込み体系化する作業は、目下奮闘中である。この作業の成果は天理教の女性観のみならず、天理教史を理解することにも繋がっていると確信している。また、女性観の内容を把握することを通して、間違いなく女性信者の信仰の深層まで掘り下げることにも役立つだろう。

親神様と教祖からの温かいご守護とご指示をいただき、次期研究への道をすでに導いてくださったのではないかと、強く予感している。それは「天理教日本人女性布教師の台湾巡教・伝道」である。滞在中幾つかのきっかけで、これからの研究方向が曙のように見え始めた。

６月の末、偶然JR京終駅の近くに「臺北臺婦分教会」の看板を初めて見た時の驚きと喜びが今も忘れられない。後にそこは台湾伝道とゆかりのある川口ハルの教会であることを知った。山名の詰所で教会報『正道』を読んだ時、諸井春子の台湾巡教の記事がよく目に留まった。９月の初日、婦人会本部に勤務されている田中有理中河大教会会長夫人に「婦人会文庫」まで連れて行ってもらい、一般公開されてない資料や文献を閲覧させていただいた。今後、中山たまへ初代会長のみならず、川口ハルと諸井春子に関する史料がアクセスしやすくなるのではないかとの希望が生まれた。また「天理教日本人女性布教師の台湾巡教・伝道」に関する研究がより一歩進む事を予感させた。今後は、中山たまへ婦人会初代会長、川口ハル臺北臺婦宣教所初代会長、諸井春子山名大教会五代会長の三女史が台湾を旅した経緯に焦点を当て、次期の研究を実施したい。したがって、2023年の夏休みに再びおやさと研究所を訪れることを希望している。

「ジェンダーと移動研究」及び「ジェンダーと宗教研究」の両方を視点に据え、台湾人女性のおぢばがえり及び日本人女性の台湾巡教・伝道の双方を把握する。そして天理教の女性が宗教的動機に基づく移動を通して、自らの主体性をどのように構築していくのか、この一連のプロセスを丹念に解明していくことが研究目的である。この研究の意義について３点を挙げることができよう。（１）天理教の台湾伝道史にジェンダーの視点を加えること。（２）台湾の地域女性史に天理教を視野に入れること。山名大教会に属する布教所と教会が嘉義県に多くあることは周知の通りである。私の大学所在地が嘉義県の北部にあり、すでに把握している19名の天理教台湾人女性布教師の多くも嘉義県にいた。（３）日台の交流史と人口移動史にジェンダーと宗教の視点に重きに置くこと。この３点を明記してさらなる研究に邁進したいと考えている。